



日本において、世界各地のダンスが踊られるようになって久しい。公演を通して見る機会もあるだろうし、よほどマイナーなものでもなければ、そのダンス教室に通うことも可能になってきている。

長年筆者は、日本においてアフリカンダンスを踊る日本人の活動実践を追っている。中でも、西アフリカ・セネガル沿岸部発祥の太鼓「サバル」、ギニアやマリなどで演奏される太鼓「ジエンバ」に合わせて踊られるダンスがその対象で

日本で異文化を踊ること

学んでいる。彼らは現地で習得したことを日本に持ち帰り、実践しているのである。

他国の文化であり、「伝統的」とされるダンスを日本人が踊ることに對して、批判的な意見が聞かれることがある。現地や、日本に住む当該地域出身者から寄せられる批判の内容は、「よそ者である日本人に踊ってほしくない」だとか、「日本人に私たちの文化がわかるはずがない」といったものである。日本人の実践者が、そのダンスの持つ歴史的・文化的背景を深く学び、現地の言葉をも理解し、敬意をもって踊っているとしよう。それでも、その土地生まれではない

望まれる

真摯な姿勢

ある。これらのダンスを踊る日本人の多くは、実際にセネガルやギニア、マリに渡航し、現地のプロのダンサーから直々にその技術を



愛知淑徳大学助教授 野 淑 菅

「よそ者」であること自体で、批判の対象になつてしまつたのである。

考えてみてほしい。例えば、日本語を流暢に話し、ある日本文化に深く精通した外国人に対して、「あの人は、日本人みたいなものだから」と褒め称えながらも、どこかで「でもやはり外国人だ」というまなざしで見えてしまわないだろうか。その出自や外見が判断に少なからず影響与えてしまつことは、不可避なのかもしれない。

異文化を何かしらの形で取り入れ実践することは、非常にデリケートな問題ををはらんでいる。「文化の盗用」問題は、しばしばユースでも取り上げられるトピックだろう。異文化を実践することが全て、その問題に通じるわけではない。しかし、異文化を「わが物顔」で実践し、発信することは許されないだろう。常に、現地への敬意を忘れず、学び続ける姿勢が望まれるのである。異文化の実践は、国際交流の面においても有益なことである。真摯（しんし）な姿勢で活動することが、肝要なのである。

かんの・しゆく 文化人類学、アフリカ地域研究、名古屋大学大学院文学研究科博士課程単位取得後満期退学。1982年生まれ。